

「小さな一歩が、誰かの居場所に」

強戸小学校 六年 稲村 百々花

犯罪のない明るい社会をつくるためには、
一体何が必要なのだろう。そう考えた時に、
私の心にうかんだのは、私が経験したつらい
出来事と日々の「あいさつ」のことでした。

私は前に、友だちとの関係でひどく傷つい
たことがあります。それまでの私は、少し人
見知りがあつたけど、ふ通に人と話をするこ
とができていました。しかし、その経験をし

てから私の心は気弱になり、周りの人の視線
や言葉が怖くなつてしまいました。初めて会
う人や、あまり話をしたことがない人の前に
行くと、きん張して思うように話ができなく
なりました。もし、きらわれたらどうしよ
うかという不安がいつも私の心の中にあいま
した。
しかし、そんな私ですが、今のクラスの中
ではちがいます。毎日、一緒に過ごす私のこ
とを一人の仲間として分かってくれている、

先生や友だちの前では、きん張することなく、笑顔でたくさん話をすることができます。このちがいは何なのかと考えた時、それは「このなら安心して自分でいられる」という気持ちがあるからだと思いましたが、先生や友だちが私を仲間として認めてくれていると分かっているから、私は安心して自分らしくいられるのだと思います。

「社会を明るくする運動」について調べるうちに、この運動が、一度間ちがいも犯してしまっただ人が地域社会の中リッに立せず、もう一度立ち直れるようにみんなが支えていく活動であることを知りました。私は、今のクラスのような「安心して居場所」を社会に作ることに同じだと思いました。一度失敗した人や、周りになじめずにいる人を、社会から見捨ててしまうことは、その人をさらに孤独にさせてしまうことになります。不安の中にいる人は、心を閉ざして気弱になっってしまうはず。本当に必要なのは、その人の存在を

認め、一緒にがんばろうと受け入れる空
気を作ることです。誰かに傷つけられて失
てしまった安心感を、周りの温かさで少し
づつ取り戻していくことが大切なのだと思
いました。

そして、その居場所づくりの第一歩こそ、
日々の「あいさつ」なのだと思ってきました。
私がまだ周りを怖がっていた時、近所の人や
先生、友だちがかけてくれた「おはよう」や
「いってらっしゃい」というあいさつは私の
心を少しずつ軽くしてくれました。あいさつ
をしてもらったことで「私は、ここにいてい
いんだ」という気持ちになりました。

私には誰かの大きな立ち直りを支えるよう
な特別なことはできませんが、過去に傷つい
て不安な気持ちでいる人の心や、声をかけら
れずに困っている人の気持ちは分かります。
だからこそ、私自身ができる「あいさつ」か
ら始めようと思います。自分から大きな声
を出すのが難しくても、相手の目を見て、心

込めておじぎをする。勇気を出して、笑顔を返してみる。それだけでも、相手に「私は、あなたの味方ですよ」というメッセージを伝えるあいさつになります。一人ひとりが誰かを気にかけて見捨てずに受け入れ合う社会が、この運動が目指す、「明るい社会」なのだと思います。私は、これからも、身近な人に温かい気持ちを届けられる存在になりたいです。